

てこな・ミュージック・ジャーナル

ベートーヴェンの時代の気候

1月13日(日) 行徳文化ホールI & I

前回に続き新人演奏会オーディションにまつわるお話と、その結果のご報告をいたしましょう。優秀賞は全部門合計で13人、最優秀賞はヴァイオリンの小関妙さんと決まりました。この方たちが出演する新人演奏会は11月17日(土)に開催されます。さらに今回は第20回目を記念して、最優秀の副賞は1月13日行徳文化ホールI & Iでの青島広志指揮、東京フィルハーモニー交響楽団との協演です。小関さんは21歳、東京芸術大学の3年生。オーディションで演奏したのはイザイ作曲の無伴奏ヴァイオリンソナタ第3番二短調でした。審査員4人すべてが妙さんを最優秀賞に、と推しました。

さて1月13日、オーケストラとの協演の曲はメンデルスゾーン・ヴァイオリンコンチェルト第1楽章。演奏していただくのは前半部分の最後です。後半は、ベートーヴェンの第5、第6、第7番の交響曲の第1楽章ばかりをずらりと並べました。青島広志さんの楽しいお話つきです。

「運命」と「田園」

あまりクラシックを知らない人でも、交響曲第5番「運命」はご存知のはずです。1808年、38歳の時に完成されたこの曲は、簡潔で斬新な「タタタ、ターン」で始まります。このテーマが、作品の堅固な理念となっており、全曲に行き渡り、作品の構築性を非常に密なものとしているのです。そして楽器法も当時としてはとても耳新しく、トロンボーン、ピッコロ、コントラファゴットを管弦楽に加えた初めての例となっています。

この同じ年に作られたのが第6番「田園」です。ベートーヴェンはその楽譜に「田舎の生活の思い出、絵画というよりも、むしろ感情の表現」と書いています。小鳥の声も、小川のせせらぎも、そして雷鳴も聞こえてきます。

ベートーヴェンの時代の気候

さてもう1曲、交響曲第7番についてお話す前に、ベートーヴェンが生きていた頃、今と比較して気候はどうだったのかをちょっと考えてみたくなりました。それは今年の夏、とても暑かったからで、温暖化の脅威があまりにも身近なものとなっているからです。ただし、1770年に生まれ、1827年に死

市川市文化振興財団 文化芸術専門員 小坂 裕子

だベートーヴェンの時代、現在のように、夏が暑すぎることも、冬が異常に暖かいこともありませんでした。

長雨や日照不足で作物は深刻な発育不全に陥り、飢饉が広がっていきました。1805年から1820年の間、ヨーロッパは小氷河期と後に呼ばれるほど気温が低く、人々は太陽のない空を恐るしげに見上げていたと伝えられています。この時代に描かれた絵に、川でスケートをしている冬の様子があります。水が凍るほどの気候だったからで、現在と当時を比較すると水温は10度以上も低かったそうです。

やがて19世紀末、森林の大規模伐採と焼き払いによる大気汚染などで、自然のバランスが崩れ始めました。それ以来、科学文明の急激な発達によって「人災」は加速するばかりです。

第7交響曲

さて話を行徳の演奏会に戻しましょう。最後の曲は交響曲第7番です。作曲していた頃、ベートーヴェンは22歳も年下の主治医の姪のテレゼ・マルファッティに恋をしていました。もちろん叶わぬ望みでしたが、恋の情熱がエネルギーとなったのでしょうか？ピアノ協奏曲、ピアノソナタと盛んに創作していました。第7番が完成された1813年は、主人との関係などで、経済的不安を抱えるようになり、それを乗り越えようと、馬車で知己の貴族に援助を頼みに走ることもありました。短い夏、そしてやがて素早く訪れる秋、寒さはすぐに迫っています。冬の最中、12月に第7交響曲は初演されました。すると、大評判となって、ベートーヴェンの声がヨーロッパ中に広まり、経済的危機を乗り越えることができました。

指揮は青島広志さん

今回は、音楽のお話をさせていただいたら右に出る人はいない！と言われる青島広志さんが指揮をしてくださいます。オーケストラはオペラシティを本拠地として、市川でも大人気の東京フィルハーモニー交響楽団です。

お正月早々に「楽しいお話つきコンサート」の初めにクラシック。チケットは好評発売中です。会場の行徳文化ホールは座席数647、オーケストラを間近に体感できます。今回は3歳以上のお子様も聞けるファミリー・コンサート。親子ペアチケットもあります。良いお席はお早めにどうぞ!!

